
 書評

大内 齋之 著

『臨時災害放送局というメディア』

(青弓社, 2018年, A5判, 230頁, 3,000円+税)

大正大学 北郷 裕美

Taisho University Hiromi KITAGO

本書は近年の未曾有な激甚災害の頻発に際し、その社会的価値を高めてきた「臨時災害放送局(以下臨災局)」についての役割を、3箇所の臨災局の丁寧な実態調査によって得られた知見に加えて、災害社会学、災害情報論、メディア論、コミュニティ論を基に理論的な分析を施した独創的な研究書であり且つ啓蒙書である。序章の中でも語られているが筆者は過去に新潟県の県域民間放送局で記者の経験を持つ。その間に新潟県中越沖地震や東日本大震災の報道に携わる中でメディアの在り方や姿勢の再評価を行うべく研究者の道を歩み始めた。その延長上に本書があり筆者の臨災局研究に対する思い、信念が感じられる。

本書の構成は、序章、第1章から第5章にわたり、第1章では一般的なコミュニティFM(継続型 免許主体が民間)と臨災局(時限型 免許主体が自治体)との相違点や特徴を明らかにする。第2章から第4章までは3箇所の臨災局の事例研究であり、発信者側と受信者側双方が被災者であるからこそその共感の構図も読み取れる。第5章では本書を最後まで貫くテーマ「臨災局の長期化の実態」の解説に入り、そのメカニズムから結論的な仮説を導いている。また各章の間に4つのコラムが挟まる

が余談、閑話とは異なり、各章の理解を促す手掛かりとして有意義な接続内容となっている。以下各章の詳細に言及する。

第1章「コミュニティFMと臨災局」では可聴範囲が市町村単位である地域ラジオ局の誕生に至る経緯と現状を総括し、その中でこれまで臨災局はどのような背景で設立に至ったかを制度や社会的文脈から詳細に解説している。そして主題である「なぜ放送が長期化したか」を問い続ける為に、臨災局を3つの特徴、すなわち「原発事故に関係しない局」「原発事故被災地の局」「原発事故避難地の局」に分類した。以後の章では各局事例としてこの点を具体的に明らかにしていく。

第2章「やまもとさいがいエフエム(りんごラジオ)」では2017年3月31日まで継続した宮城県山元町の事例を扱う。この章も含め各局の膨大な且つ詳細な放送データを余す事無く分析している筆者の努力には同じ研究者として敬服に値する。ここでは放送内容と情報の詳細を8つの大項目、さらに198の小項目に分類している。行政情報、生活情報、娯楽…等々時系列で番組内容が変遷していく様は興味深い。これは後に続く知見であるが被災地の復旧・復興段階へ移行するに連れて希

求される情報内容やその主体が行政から町民に移行することと合致する。言い換えれば平時のコミュニティFMプログラムに近づくのである。ただし求められる情報は変化しても減衰することはない。これは放送の長期継続により送り手と受け手の双方向コミュニケーションの場という利用価値が共有された結果に結び付けられる。

第3章「みなみそうまさいがいエフエム「南相馬ひばりFM」」ここでは福島県南相馬市の事例が紹介されている。ここは代表的な原発事故被災地であり避難していた市民が帰還する時期から行政情報伝達を主目的にスタートした。当初こそ情報主体の時期が継続したが、ある日リスナーからの予期せぬクレームから偶然双方向のコミュニケーションが生まれた。結果、被災した市民の様々な思いや事情を知ることになり情報伝達からコミュニケーション循環へと主体が変化する。ここでもまた臨災局からコミュニティFMへの緩やかな移行が生まれていく過程が論じられる。

第4章「とみおかさいがいエフエム「おだがいさまFM」」である。当初は避難先である郡山市内の避難所ビッグパレット内のミニFM局として開設され、その一年後に富岡町には戻れない町民のための「町を持たない自治体」としては異例の臨災局が仮設住宅内の「おだがいさまセンター（生活支援ボランティアセンター）」に再設置される。まさに原発避難特例として認可された稀なケースで同時にネット放送も開始した。そして放射能汚染のため帰還が叶わず全国に離散した富岡町民の心を「声」と「音」でつなぐ役割を果たすのである。ミニFM局当時はスタジオも避難所の仕切り壁で作るなど簡易なものであったが、それがむしろ情報送信側とリスナーとの物理的な一体感を生むことになる。すなわちラジオ放送を「見に」来る町民の誕生である。その後場所を替えて正式に臨災局として再生したが当初の情報共有化という目的がすでに緊急対応ではなく、復旧・復興に向かう被災市民の声の交換、更には「涙」や「笑い」

を介した町民主体のコミュニケーションサロンのな広場化が実現する。ここで筆者はコラム内でも触れているが、放送内で頻繁に使われていた方言にも注目する。被災してバラバラになった全国各地の町民がラジオから聞こえる「音」を通してつながっていく。この音の中に、方言を通じて心象と風景が伴う「サウンドスケープ」としての機能、すなわち郷愁の喚起効果を挙げている。これが筆者によるメディア学からだけではなく「方言学」からの分析であることは興味深い。

第5章「臨災局の長期化の実態」では先にも述べたが、本書を最後まで貫くテーマをここまでの事例とその分析を通して総括していく。まず災害過程サイクルを示すことで、時系列の推移に伴う段階的な変化を追っていく。それは①緊急段階、②応急段階、③復旧・復興段階、④予防段階と言う流れである。これは第2章から第4章までの各地域の事例に倣えば、必要とされる情報の変化(行政情報主体から町民主体の生活情報の共有)とともに「上からの復旧・復興→下からの復旧・復興」へと進むものであり、コミュニケーションの一方から双方向への変化過程と一致している。まさに被災地が「地域社会」を取り戻していく過程と捉えている。この過程分析により、まさに筆者の言う「臨災局の長期化を促すメカニズム」の解明の端緒につくこととなる。

ただし筆者は徒に長期化を望む立場にはいない。特に頻繁に囁かれる「臨災局の移行継続問題」におけるハードやソフトのコスト負担の考え方、公的支援に伴う「放送制度」の改訂議論等の「見えない出口」探しには参加しない。筆者はむしろ「もっと広い視野からの(本質的な)議論」の必要性を提案している。本書はその議論を進める一助として大変有益な情報源であり、且つこれまで語られて来なかった様々な視点や理論の援用を提示した画期的な臨災局の研究書であると考えられる。筆者の今後の研究活動の中で、まさに本書の続編としてのメディアの在り方や可能性提示に大いに期待するものである。